小川為治 開化問答

ヲ 1
3479
2

門ヲ1
3479
巻 2

昭和十三年
二月七日
購求

武州
新堀家
名蔵

小川為治著述
開化問答巻下

小川
開次郎

さて一服ぐらいまたかふされのぶまく法談義をえんじめまゝせうそくつで今乃法倫てゝ當時政府ゑく法取立ゆきあ諸運止い皆無理ゆゑぐなへぐ是迄通り百姓の諸年貢ぐかりまるれい法

仁政てゆいといひゆきあ失禮ゆこのぐ於れ

ゆ第一の心得違といふものてゆぐあ何故といふ

先刻から口が酸くなるほど法話や通り今天子様乃法
政事を施し殆ど人皆民百姓我こゝ乃為てさぐるさま
貢運上を法取立なきるも矢張民百姓我こゝ乃為てさぐ
こゝのこけい甚紅り曷きまとふく今上ふ政府といふ物が
く世乃中を取締する者がなければ世間ハ暗闇ゐて押
込盗賊ハ勿論人を殺しても咎るこのなく我物と
奪ハまとくも訴へなとも強がぶぎて外まれまれば金
銭を貯へるまとも田地田畑を所持するこのゝ
出来ず實ふ弱ゐ人い詮方なく饑死てもまとこと

ふ落入ませう落しまく試ふまれらの害を防ぐんと
思へ、駄多乃金銭を拠ち盗賊乃番人やら田地
乃番人やふ大勢召抱へるあき始終心配しく氣を
附て居なくない外まれ悪ひもなく
萬民枕を安く家業を營まれるハまれ上ふ天子様
のまうしまし政府ふ法役人が偽りなく法政事を
施し殆ふゆえ乃事なく實ふ些少の年貢運上を
出しかくふ大なる恵を受ると思へば世乃中ふ政
事など安き物いなきまとませんさく世乃中の仕ゐハ

何事をするにも扶持ハ乃入用がすくなくてハすまぬ筈
なるに天子様の治政事をするにも諸役人の月給
から紙筆些末の物に至るまでの入用ハ日本國中
へ割合出させるとの仕法ハ出さるもの何故ハ
を國中惣躰より出さるとハ扨色々の仕事
ハ日本國中乃人へ関係なる仕事ハ多くなる大仕
事をするにハ多き人等が大勢寄合てとく混
雑のゝ生じ纏りが付ぬゆゑ天子様治一人に頼ず
たるけ多く政府ハ人民の仕事を取扱ふ場所天子

様ハ請負人乃頭取ばかりなれば政府がなくてハ
迚ら乃仕事を銘く各く一分ヅヽ引受取扱ふばかりぬ
あるとて年貢運上を出すハ恰も已のよがき仕事
を人に頼ずして入費を辨へずして同様にて
さるゆ又政府乃恵を受るゆ百姓町人皆同様なるに
今まで百姓のゝ年貢を出せしハ實に理に適れる
るとしていおざる人ら扶れゆゑ追く百姓が耕作を
きらひ職人商人に業を傳ず絶て產物の出来
がすくなくなり随て職人商人の家業も衰微す

るさとて大きなる元素田地を耕作しゝ一ヶ年千両の
收納を得る百姓が百両乃年貢を出せハ高をなし
なる仕事をなすゝく千両乃儲ある商人職人ハ同
じく百両乃年貢を出しゝくよろしき筈てなるなれ
ハいと知るへきあしゝく百姓丁人とも同様ふ
政府乃恵をうけ同様ふ日本乃土地ふ住居ふ同様
ふ日本人乃権利を保ち皆同様安穏ふ家業を營
むゆゑてなきなるとハ是迫百姓乃ミ年貢を出せしい
實ふ不公平ふしゝ大きしゝ終ふ國乃産物が衰微す

るなり　成行ならしてなるなれ　政府ふ租税を
收納する有れを法話ます先租税ふハ二様乃区別を
なゝく法取上なる事でなる一を私有税とゝ是
ハ人乃家産ふ付て取る運上ふ田地家作乃類
乃運上をゝハ一を物品税とゝ是ハ絹糸蠶卵
紙乃類すなゝく産物ふ收る運上をゝ物品税ハ人
間必用乃品物かゝハとらざる規則なくてのかゝり玩
物乃類奢侈ふ屬する物かゝハ重き運上を取ること
てなる譬へバ五穀紙油乃類かゝハ運上をとゝ

しかく金銀乃細工菓子酒煙草乃類芝居寄場か
座敷娼妓藝妓抔かふハ重き運上をとるとて おさる
何故おさらの物かく重き運上を取るといふふと
きつふれ物ハ畢竟人乃情を慰るまで乃用をいたと
へおきつふれ物がなきとて人間乃生活ハきまりげか
あるとけもおくよく勘考しく見ると無益ふ属
おき物てあるおさらの場合ふくおさらの物
を廃止るとハ、ゆゑの如ゆゑ只是等乃物しか重き
運上を取立國用を助るとしてあるる殊ハ貧ナる數渡

世娼妓藝妓の属ハ遊民とふく世間乃為ハ何乃益も
なきゆるもだめしくひてあるるさきと無理ふその家業
を禁止るハ當人乃自由を妨るけふ落入政府ふく
も濟ぬおとゆゑたゞ殊更重き運上を取立自然正途
乃家業を營もゆるるのてあるるさく前まる法
話乃通り日本中の人が政府乃為ふ年貢運上を納
るハ詰り已乃仕事を天子様へ依ミ乃おきその
入用を辯へるおとなるハ銘ミ家産乃大小ふ從ひ公
平ふ割合出銀するハ当然乃理合てあるる且天子様

惟曉

性理大全
月落烏啼霜滿天
江楓漁火對愁眠

ハ古を法取立ケるも法自分様乃榮耀栄花
ハ法用ゐなさる事ハ更くなく法自分さまハ宮内省
とゆふ法役所乃法賄ひなく一年総六十萬両位乃法
くふしてゐざるナント勿躰なき事乃法倹約ていざさ
りませんかその餘ハ悉く政府乃入用まく譬へバ大蔵
省ハ農業を勧め産物を殖ヤ通用金を製造
世間乃融通をよくく年貢運上を取立國用を足す
等乃入用があり文部省ハ世乃人乃學問を勧め
智識を明ふさせ人く乃幸福を増させんと世話する

入用かゐざるその他諸役所ハ皆ハ人民の受持
かありてその仕事を行ふ費用ハ皆銘くよりて納めと
当年貢運上ハ辛しるおくてゐざるさきバ足下乃
彼是法論ハ理窟ハ多く僻論ハ正真乃
道理をゑんふさるぬゆゑかと思ひ外
㊄舊平
段くとの法ハ多くだきよく呑込まること ダカ僕ハまこと口
を噤で嘴るとけふハゆきませんをきハ多くだしいふ
交易乃ちとてゐざる僕乃考へふハ天乃様が法直ふ

法政事をちっきらゆうのかるくくを見迫公方様ゐ由可
愛がりちっきっつと西洋人等ハ直ふ由掃攘ふかるたろう
と思ふく楽人て居外しふ矢張以前の公方様と同ト
事ふくあまけふ法一新以来ハ交易場乃数も殖え當
時てハ丁度五ヶ所ておぐるナント大変ハ更ふ合点乃
行ぬ大とてハおぐりませんかある方乃法話ふ元来ハ
の日本とハ國ハ神國ておぐるかふ日本人乃知恵と
ハ中く西洋人等乃およびもないとして物事
何ゐ角も十分ふ備ふく何一の不足乃ない世界随一乃國

どうしておぐるそれて慾乃深い西洋人等ハ已が悪國
て物事不足だふしぐく物ざかふ世界中乃國ゐふ唯
一ッ乃日本國を目掛く来く彼奴等乃國乃何乃益
ふも立ない品物を持渡り日本乃結構なる品ゐを
買出し追く日本乃諸品を置盡し結局ふハ日本國
を乗取ふとハ不届千萬ふ企をまろうあておぐる
ゆゑ近来諸色が拂底ふく物乃直段ハ三ふ元
乃二増倍三増倍ふもあふく誰も彼もこる難渋し
く居り外ふ為ゐ彼奴等乃仕業ておぐるゐ不

じ悪い西洋人等をゐんで天子様い大事ゐゐさつこ
彼奴等ろいゑ通りゐるさるゐトントつけがつか
らぬ古くさの舊平抔い藥鑵頭が沸騰るやうゐ
思ハ出外

開次郎

舊手君足下まご正真の道理を考んゐきらぬゆえか
のゐ疑ろ生じるゐとおくまんゐはきらぬ僻論を強
く言立をゐきるゐと誘ゐいゑ闇黒ろ恥を白日へ出す
やうゐるものゐく詰り足下ろ頑固がつかり却るく人

ゐ笑ハ出るゐとかと思ひ外何故足下ろ言葉ゐ僻
論だといゑゐもと天子様が外國の交易を法許ゐき
つたるゐけ柄ろゐい畢竟天道様ろ法趣意ゐ志
たがひゐさるゐとてゐるろけい先人間ろゐ
ものハ一人でハとても世を渡られぬ筈ろものゐく
その證據ハ一人ろ身ゐい衣服も入用きりまご住居も入用てゐるゐとろ品物を
得るゐとても一人しく悉く製造るけゐいぬのゐゆ
え自分ハ自分ろ一ろ家業を營み自分ろ製造と

餘分の品物を以て已の欲しく思ふ品物と取替へ
用を足すまでにて其その取習へる所就て近所郡
家又ハ五十里百里さきの人とも取替へねバならぬまと
ゝ其さく人間交易の源天道様の法思召てゝ
まと人間ハ父母兄弟といふものがありてそれから親
類しらふものがあきく出来それが段々繁殖して遂ハ一
郷一國をなしたるけてゝ今ても田舎ハ一村悉く
親類ゞるゞゝ場所がいくらもあるまとてゝ
さく世界の出来たるハ天法中主神といふ

神様がありそれ高産霊神神産霊神といふ
二人の神様がまとまた其の神様の徳ハよつて此
地球も出来人間もいろ〳〵出来るまとふ
ハ源ハ溯て見れバ西洋人だとも元我国一種の
親族でありしが世を経るハ後て名も違ふ國の人
ハあるいろまでのまとてゝ其ゆゑ人間の親子兄
弟親類ハ交際も近所郡家の人ハ交際も五十里
百里さきの人ハ交際も西洋人ハ交際も同じ
さとふく其又全く天道様の法思召てゝ

是迄日本ハ日本だけで何一つ不自由なく居るとの外國と交易がなくまつく諸色高直になり下るか難渋まらしらいとおりません何故といふに人間ハ一日も交易せねば居られぬものゆゑ交易といハ自分の餘分なる品物をいつ自分のものと思ひ品物と取替へるとでもいふべきもの世のひらきまでめの交易ハいはゆる物と物とを取替へるゆゑ譬へハ穀屋の米ハそ已の餘分の米を以て紙や半四郎の紙と取替へ織物屋の椋助ハ已の餘分なる織物を以て金物屋の

鉄蔵の双物鍋釜と取替へるかくなくてめい物と物との取替へをしつく居たるが段々と不都合のことのなる多きゆゑ又一つの知恵をもて通用金といふものを製造たるこれてなくなる通用金があれば我餘分の品物を通用金ふ取替へおき何時なりとも不しき品物を入用だけ求るなりとか出来るゆゑ以前と百倍の便利を增しさてなくなるさて通用金が出来るゆゑ夷買交易抔といふ名目も出来へし夷買交易ハなどいふ事の大本をもらぬなしといふあつた

迚ど矢張以前の物と物との取替へに過ぎざるまでの人さまでの人とが日々に入用なる品物を賣買するに矢張古の交易に今でい交易とまでいへば西洋人と賣買する事乃柢ふのを思ふに大いなる誤てざる又西洋人と交易をせねばならぬとまでい試に考てざらんにまさに今古に何かを細があるべく人々日用品乃賣買の出来ぬまでの事件がおさまらぬ各々乃難渋ハ多論終に古の世に人種が盡るまで成行ませうナント此等乃理合を法知人なまでたらば交易い天道

様乃法趣意にまでい人間乃大利益をする物だといふ事ハ一ぱいまでまりませうまでまでば日本同士交易するも西洋人と交易するのも只大きいと小さいの相違のまでまでの理合ハ同じ事にて天道様乃法趣意に従ひ人間の幸福を増さんため乃仕業でざるまでに頑固なるくやまで日本ハ日本だけでなるに一ぱい不自由まで抔まをさまで外ハ皆理をまでぬ言葉でざる既に不自由乃あった驗ハ天保年中乃饑饉を法考へまでまで外たの時い道傍に行倒るまで居る者が山乃ものに多あったと申さる

ふ慶應年中ノ不作ハ外國深ノ法義を以て一
人も餓死するものハなぐりませんナントさせてもふふ
一ノ不自由ないとまをさきませうかさせ皆天道様の
法趣意を守ると守らぬとまるさとてなぐり外今是
ふ由て考へて見せば天保年中ノ饑饉ハ丁度一人
者が常時親類や近鄰と交際ずふ居て病ふ罹
りたる時誰一人看病するものもなく終ふ死ふ陥た
ると同様ふて誠ふ悲しいさでいなぐて人ハ且人間
ものハ段々開化ふ来る從て物事ノ全体

古ノ風を好む天性がある者ばかり唯一通り入用ふ物
ばかりでハ用が足りませんを世を一通りノ物ばかりてす
もそふハ体ふ開ぬたい國ノ古として過ぎる今日入用な
物ばかりかそんさバ米味噌醤油薪炭油ノ外ノ
数品てなさるさるさバ衣類抔も木綿でさしらへたノが
一二枚家居も外ノ桶ふ茅ノ屋根ふて用ノ足りること
ふなりさるさじ併し人ノその通りふ行ハなくて已が勉強
ふよて自然饒福ふなるさば衣類も木綿よりて紬つむぎ
よて縮緬と段々美物を著用し家居も木作りよて

土蔵土蔵より石作りと段々美室ゑ居るゑとを好む
ハ大自天然ゑ〳〵人間乃天性てゝ過る壁へバ煙そと
りゑものハ昔し菱長乃頃外國かゑもゞめて種がて
たり九州邊ゑて作りそめしものゑその後火災乃
恐があるといふて徳川三代の公方様乃頃ゑハ度々作
るゑとを禁止たりを度どつひゑ慶止るゑとが出来ず
今てハ日用乃一品ゑて煙草煙草入喜世留乃數を
賣買して浚世まる者數へ盡さぬ人ゑとでハゑぎゝ人
かその乃ゑか女乃揺符ゑるとの屬ハ實ゑ奢をきいめて

ものて是皆世乃開希と考るゝてゝ過るゑきハ船来
乃藥種砂糖鉄類羅紗西洋ゑ綿時斗石鹸の類
もまて今日乃日用物ゑて今急ゑ交易を法禁止ゑ
ゑる事バ田舎ハゑて東京抔ゑハ忽ち支るとのが
沢山あるゑとてゝ過るゑきハ政府ゑて外國交易を法
開きゑさゝるハ畢竟銘々乃為ゑ互ゑ不しき物を
取替へ物事を全備して人間乃歓樂を増さぬ人
めゝ乃ゑとゑて五ヶ所乃交易場てハまて不足ゑ位
てゝ過るゑきて徳川家てをゞめて外國と交易を

法開きに成るる頃い諸色が急に高直成り世の人がいろ〳〵難渋を唱へましたがおの頃に成ると物事に段〳〵折合がつき諸色も追〳〵下落し誰一人難渋をいふ者はなへぬ成り外こまき諸品乃賣方がよき所から元方乃人〳〵か皆精を出し追〳〵品物乃仕出しか沢山に成るまて来ゆゑまた〳〵おの末とも銘〳〵精を出し〳〵色〳〵乃品物を製造へ外國と交易さまざまに一人乃富ばかりていなく日本國中乃富に成り遂に日本ハ世界一番乃富國に成るまとふく〳〵

考へ出いあるうるきまとておきろ

㊅ 舊平

足下乃法理解まく外國と交易乃理合乃あり僕乃見迫乃疑ひハ大抵とけ外こまきどまざく指黙く引込ゆけふいゆきませんそきいおの節政府まく所〳〵へ學校を法取建まきき下〳〵へ學問をまるやう法世話あまる學問をする事ハよい事だしい聞く居り外〳〵が當時法上ふく法勸ちまる學問ハこんに模文字ふく一寸見てハ蚯蚓がのたくるやうまる文字

ぢかり是迄乃學問い皆陸奥しふく四書五經抔い
ふるのい手ふるるものゝ外ちきとの外さうしふく見るとゝ
日本乃是迄乃書籍とゝ物ハ益ふ立ぬ物てござる
かゝふる益ふ立ぬ物なるゝ今迄人〻が孫重する筈も
なし儒者や學者を尊敬まるるけもござり外まひ
きゝいさゝらハ政府て西洋ぢきとまろめふちんてゝ
彼奴等乃物まふかまふんよきあとだと思ひ大ふ妖惑
さゝさくあるとまろていおぢゝんか
開次郎

成程此等乃疑ひ一應い法理乃ゆうふ聞ゆゝさゝど元ふ
ハ深き理合乃あるあとてござる先文字とゝふるものハ人
の意を達し世乃中乃理合を知るため乃道具まくい
まぐ言葉乃あゝりをまく物てござるそゝを漢土乃文
字とゝふ物いその數ニ萬六千もあるあとなりゝばあの文
字を用るゝ用を足さんと思ふ者ハ文字を知る為ふ
二年三年乃日數を費やさねハまゝふ成あとてござる又
日本乃いゝはハ四十七文字西洋乃横文字ハ二十六
文字ゝゝゝハ日本や西洋の字を知るハ一身もあるゝゝバ

出来るようにかくまめ得失を考へまいむづかしき文字
乃為に余斗る光陰を費やしハ真に無益なおとて
おざるもと文字とよろ物ハ前にも伝話ト通り世の中
乃理を知る為乃道具なれバ恰も大工や左官乃鑿
鉋泥鏝抔と同様なる物ておざる今大工や左官が道具
ばかり沢山所持しても居ても家を作るおとや壁
を塗るおとをきらふなれまハ用ふ立ハまた学問と
くも同じ事いか程むづかしき文字を沢山知ても
理合をきらふねバ用ふ立ませんそれハ道具ばかりの穿

鑿ハ二年三年費やすハ馬鹿乃上ケ癡獣の親玉
ともト ませうとおもふ漢文字乃不便ふまろておざる又
学問とハ唯むづかしき文字を知り解しがたき古文
をよく和歌を詠し詩を作ることと世上ふ實乃ふき
文学をもつよおとていぶざりませぬおもふ乃文学も随
分人乃為ふなるおとをもあせども古来世間乃儒者和
学者ふとの程おまて ながめ尊むべきものでハな
ざらぬ昔しよて漢学者ふ世帯持乃上手なるも
のも以く和歌をよくしく商賣ふ巧者なる町人

も稀てゞあるゆゑ心ある百姓丁人ハその子乃學問
ふ出精するを見るやがて身代を持崩すとゝ人と親
心ふ心配するものもあるゝ無理るふめ乃けてゞあるゝ
ゝ世その學問の實ふ遠く日用の間ふ合ぬ論據て
ばゞる今かゝる實ゝ學問ハきゝおき專ら勉もべ
きハ人間普通日用乃學問てゞあるゝ譬へバいろは四
十七文字を習ひ手紙乃文言帳合乃仕方算盤乃
稽古天秤乃取扱等を心得るふ又まゝ人で學もべき
筈ハいたゝまぐゝ多くゝ地理學とハ日本國中ハ

勿論世界萬國乃風土道業門究理學とハ天地萬物乃
性質を見分ゝその傳を考る學問歴史とハ年代記乃
くハしき物ゝゝ萬國古今乃有れを詮索する書物經濟學と
ハ一身一家乃世帯より一國天下乃世帯の持方を說くもの
脩身學とハ身乃行ひを脩め人ふ交りまの世を渉る爲ゝ天
然乃道理を述たるものゝ是等の學問ハ人乃貴賤ふかゝわ
一般ふ知らで叶ハぬまゝだとゝふハすでふ學問乃すゝめとゝふふ藉
ふ記載してゞある何故まゝ學乃事をゝゝでかゝる筈ゝふふ譬
へバ寒氣乃強き時ゝゝ寒きを防ぐが爲障子を閉

密さ火を盛るあたゝ大勢群りて居れい皆かゝる通
上りて鼻血を出すやうなるあとがおざるなれ空氣か流
通せぬ炭素なる物が外へ出ぬゆえなるべく究理學を考
へ人いおきるなれば理を悟るまゝにおぎる又人と云もの
ハ前日乃儲を貯へるべく今日乃生活をする筈乃ものなれ
ハ無益なまゝに一錢も用ゐず今日乃儲を溜るおいてゝ
まゝ後日乃患に備へるべきハなるべ又おぎるなの理
合を考るハ經濟學をもて人ハ他人乃異
見を受るに及ばず自然自分から質素倹約をするなと

てゝおぎるなこと成ればハ皆學問乃力ていおきりませんか
なぜなれば百姓なれハ耕作乃爲是迄乃仕方をかく改正
しゝ方が取上高も殖え手数もかゝらぬと此等の事を
考へるふハ植物學地質學化學抔入用なり職人なれハ
此車ハ在来の造り方をかく改正した方が手軽く
しゝ便利なるべんしかゝる事を考へるふハ器械學入用
なり商人なれハ品物ハ何國乃出来ゝ製造ゝ
元手ハ何程位かゝり世間へ一ヶ年乃賣し高ハ何程位
と此等のなしゝを考へるふハ地理學物産學抔入用なり

すべてこれ等の學問は今迄日本人の氣が附ぬこと
ゝ皆西洋人の考へ出したる事なれば此等の學問き
まるゝ何れも西洋の翻譯書を取調べ大抵の事は日
本の假名まじり用を便とし或は年少みづから文才あること
のへは横文字をも讀ませ一科一學も實事を押へその
事に就きその物に從ひ近く物事の道理を知りたる今
日の用を達するにきはまるゝが肝要にて候る若人間
普通の實學をしらず人こゝろのは皆悉くたゝ一むべき
心得にて候るこの心得あつて後に四民とも人の危険に

なりゆく家業を營み次第に繁昌あるべつひに獨立不羈の
人間となりて候る漢土の學問も隨分よき
ことあり人の爲にまなぶべきことゝ究竟
理會いたす程のことはあらはしたる文字のくもづかしく
骨折て利益とを較べたる到底利益はすくなきことにて
候る今てゝ強ち佳上なる漢學を信じ候つたこと
にて事はなりませんに西洋の學問をしたる方が日用の
益になり身の爲になることは專そなへ道理きこと
はこれまで古來學問の道は情を原ねた

外から力があつて根柔乃よき人いその人乃了簡次第和漢洋ともひろく學ふがよろしい事てござる唯普通乃くの學問ハ理合を知るを專一ともく假名抔あく用を足す方が便利ゆゑ法上てもその法趣意を以て所くへ學校を取設讀め易き文字なく人間日用乃爲ゆなる學問を教へ人才を造育ちきて まして ござるそれを西洋人ハ妖惑さきと居る抔といきて ハ畢竟學問乃理合を知んなきゆゑ足下乃頑愚とのてござる

(七)舊平

妙く足下乃法溝釋ともく西洋乃學問を學ぶとけハきつかりとなかりましてとかくとなかに就くハもう一議論せねバなるぬまとがおざるそれハ去の頃世間乃風俗を見るふとなを是迄乃家作を西洋風ハ作りの〳〵頭ハ散髪ゆく身躰ハ窄袖細袴を纏ひ食物ハ牛乃油煎がよハ乃豕乃煮閉ハ去とゆとゆく居り外ナンと是てハまとて西洋くハ隨從ともまつるゆとゆく真ハ歎かハしいまとてハおどゆとゆんか是迄四足を食ふと

ハ神様ノ罰があたる　織ハ一い物だと日本ノ人ハ誰も
食ふ者ハあざふぬたまゝ　薬食ハ猪ちゞ食へバ三日
の間ハ神様へ手を合せる事も出来ぬ程ノ忌しゝふ
ゝ迄であり　神國ノ貴いところがあらしいものでは
ざるゝ迄を此節ハ牛鍋ゞゝか豕鍋ちゝか牛の
乳がよいノちゝどノかゞどノといひちらしその口を濁も
せば神棚へ向ひく拜禮をゝげるい不程拜禮をる
しゝとてちんて神様か承知なき迄ハ世ゝ罰ノ當
らぬハそのくノ幸てざる又家作りも是迄日本ハ日

本だけふいくゝふゝ調法な作り方もあり立派な作り
方もざるゝ迄を煉化石どの石作りだのゝゝく
無益ふ高い金銭を費ゆ何ノ利益がありませゝ唯
其家ふ住居ゝく鬚でも生ゝやゝゝふ西洋人を真似
るよ迄ノか功能ハざゝり非ひ又衣服もゝゝだ冬ハ
綿入夏ハ単物と日本人ハ日本服て沢山用が足ゝく居
り外ゝ迄を世ノ生物識ノ半生熟な奴等ハ今急
ふ氣ノ附くゆゝ家神細袴を著用ちゝ蝙蝠傘を手
ふ持驕慢な面付をゝく偶恒體ノ衣服を著さるゝ

くゝ逢へハ開きぬとゝ野蠻だとかいひたの人等の仲
間かゝハ人間てあいやうゝ居り外殊ゝ異風ゝの
ハ散髪てゞぎるもとゝハ人乃女房でも盗ミ申ゞがあいと
いゝ時ハ頭を剃ゝ坊主ゝ坊ゝ詑ことゝてゞぎる
さゝ世ハ當時乃人ハこゝる悪事をまゝ企き下心を以く轉
ぬ先乃前杖ゝかく散髪ゝ何ゝ考乃合
点のゆゝ了簡てゞぎるその僻ゝく高慢ゝく散髪
ゝ世ハ直ゝ物識りのゝりをゝ世ハ文明だとか
開化だとか開きたとか申ぬとかーンー白痴が新田

開發をまゝ申ゝ為ゝ居り外さ世ハ是等ハ
皆余斗ゝる仕事ゝ了簡もなく無益ゝ西洋
人乃真似をまゝる人等が多く世ハ自然人情が浮薄
ゝ徳實ゝ心ハ失く終ハ真實西洋人ゝ随従ふや
うゝり行ませうさ世ハ矢張是迄通り髪を結ひ袖乃
ある衣服を著用ゝ西洋風乃家作を禁ゝ四足
ハ食ぬゝ法布令のあゝ方がよいかゝ思ひ外
開次郎
成程足下乃理窟ハ一應ハ法光乃ゝ聞ゆ世ども

悠々閑々

正真乃理合ハ更ゆ知ん なきゝぶぬ ちゝて ぢぐる 先食物と
ト者ハ畢竟身躰乃滋養ふ食ふ ゝけふ〳〵 ちんでも
身躰乃為ふ ゝる物を食ふ ゝる ゝ也ハ ゝゝぶぬ ちゝて ぢぐる
そ也を日本の食物ゝゝ者ハ只口ふうまきゝを専一〳〵く
養生抔乃ちゝい聊もかまいませぬゝ也バ日本人ハ根氣
弱く西洋人乃ゝゝふ蒸氣船や傳信機抔乃大發明を
ゝる事ハ出来ませんゝゝく第一身躰乃滋養ふ ゝる
ゝき食物ハ牛肉牛乳豚肉鳥肉の類ゝく ゝ也ハ西洋
人が化學〳〵物乃原質を取調べる學問ゝ〳〵 悉

く調へ聊疑のゐゐ ゝて ぢぐる又昔〳〵ハ獸乃肉を食ハ
ぬゝいふハよく古〳〵へを ゝぶぬ人乃言葉ぢぐる既ふ古
語拾遺ゝふ書籍ふ大國主神乃營田乃日ふ宍を以
乃田を作る人ふ食ハ〳〵め給へる ゝがぢぐる又人乃世し
ゝ〳〵ハ仁德天皇様ハ鬼麻野乃麻の声を聞ゝ ゝこの
肉を召上ゝふ忍び ゝ孝德天皇様ハ牛の乳を飲
ゝ ゝ ゝ ゝ宍を ぢぐ ゝものふ和藥使主ゝふ氏姓
を ゝ ゝ抔いふ〳〵へ獸肉や牛乳を用る給ひ〳〵證
據ゝく皆悉く書物ふ書載ゝぢぐる特ふ今ても信

州諏訪乃祭ハ百疋の鹿の頭を供へるおしがおがさるお
れ神代の遺風みるいふしへよりて獣肉を忌まぬもるし
でおがさるさまバ機あどいふ事ハ佛法か傳ふ以来坊主
等乃いひ出せしおしふく取ハ足らぬおしておがさる又當
節家作ちまるハ強西洋乃風を真似るといふこけハ
おがさるへ乃ちまじも今迄乃家他ハ第一火事乃恵があ
るし第二ハ養生乃法ハ適ぬゆゑ身躰乃為を思ふ
人ハ追ふ西洋風ハ立つのへるおしふく又考へる信覧な
さまを是迄乃土蔵を作ると西洋風乃普請をまると

ゆゑが安直ハ出来ハかまを金銭を
費やしとゆ埋ハおがさる外まひるまを一つ下おしと
がおがさるもし流行病しるふものハ水酒りや膏薬類の
大陽ハてるよりまを蒸熱気を人が嗅込をるまから
發るおしておがさる又空氣しるふ物ハ大切なるものにて
空気がなるまをバ人間ハ生活る居るおしが出来ません
るまをゆゑ家他ハつねにあく空氣乃流通するやう水溜
りや膏度物乃清潔ハ掃除の出来るやうおしふへるが
肝要でおがさるまを是迄乃家他乃仕方ハトント

むちやくちやあるく床ハ低し風ハ入らぬ様の下ハ水
が湛へて居る腐穢物ハ家乃周圍ハ棄てあるナント
是でハ年中藥と病人乃絶ぬハあるまへかしらて
ハがきふんか窄袖や細袴を著用するものを四かまし
いなどが出もきあえぬおとてあぎる先日本乃大古
い乃風俗ハ長き窄袖あるい頭も惣髪の撫下げてゞ
ざるを出ハ古き画抔も見えて書物なども塗擦が澤
山ぶきるを出ハ中古より漢土の風が移り袖も長く
し髪も結ふ出てあぎる半髪野郎頭とな

ものハ乱世乃陋しき風なるやく三四百年以来乃
ものハ便利を專一ハせねハ
ならぬものなるく譬へハ物を運ぶハ荷ふよりも車乃方
が便利よきゆゑ自然車を用ゐるやうハ成行きとなる
萬事ミな同じ事てあぎるゆゑ長い袖のふり
ちゆふしく邪ケあるよりハ誰も便利よき窄袖を
著用するなとあるゆゑ不便でも長い袖の衣服を
著るといふるなるハ世乃中の仕事皆便利を舍て
不便利なるなとへ主戻らねハなりなきゆゑハ百

姓い便利ふ鍬鍬を舎く手を以て田を作り職人い便利ふ鉋鋸を舎く手を以て家を作るナントなら馬糞ふきを誰も承知するものいなぎり外まひさく出ぬかく散髪乃話ハ移りませう先散髪ハ出ぬ養生便利倹約の三徳がなぎる第一養生とハ人間乃頭脳い精神乃住居なく大切なとなろて出ぬる所ゆゑ天道様が造へるハなく大丈夫なる骨を組合せ其上ハ皮を覆ひ又髪乃毛を覆ひ又其上ハ帽子を冠る是大切なる事を人ハとくせる自然乃妙理て

なぎるを生を身代を剃ハが日ゆてくさを(霜ハ霜ハ)ちゃ出ぬくい一寸考へくも天道様乃意ハ情を不養生乃ものていなぎるが第二便利とハ一寸他へゆくハも髪結乃手を待す我手ちく撫付用が足り外第三倹約とハ油を結乃冗費を省き殊ハ夏向ハ鬢付油の蒸暑臭き白ひもなく臭ハ愈快なものてなぎるナントは是等ハても散髪乃利益ハなかりまたらうさく段々活語り通り肉類ハ養生乃為ハ食らふ殊ハ昔ハよを天子様をとめ召上らぬ人と

西洋風の家作窓袖散髪なるあれ便利養生
の為てさざる且窓袖散髪ハ日本の古風なれバ強て西
洋を真似ることいふもおろかまひさきバ足下の法
論ハこゝ本を正さぬ誤ふく一ツも理ふ合ぬあらてさざる
従しかゝる世の半生熟先生ハ古学ぶの弓けもあ
ら只肩替ふ開化めかゝ人もありく真の物識の眼ふ
ハ片眼痛さとのゝ多いてさざるさ学ぶら自然と此等
の規則ふかゝへハまゝ當人の為ふハいか程か利益あるま
とふく他の偏屈ふ凝結く居る人よて幾等の徳を

得るかもしれません唯ねがハくハ此等の人半生熟なる
浮薄心をやめ真實ふその利益を受るやういたゝ
さざる

八　舊平

足下の法話ハこゝ〳〵く法を至極よく呑込また僕も
今迄ハそんな道理ハ分らず唯昔し堅氣の偏屈か
ら此頃の事ハ皆異れ如てゝ思ハ
く居たが今の法理解で始く夢がさめまたさりふ
のうまゝ一ハどうも僕の胸ふ落ない事がさざるゝ

ちんだとらふゐ蒸氣車や傳信機の事てざるる世間
乃噂をきくゐ鉄道を造るゐ人を生埋ゐをゐれば
出来ぬ傳信機ハ女乃生血を銅線へぬるゆゑ遠方へ
音信が通じる是皆切支丹乃仕法ゐ〳〵西洋人が此等
の事を日本人ゐ見せ膽をつぬさせその虚ゐ乗〳〵日本
を奪ふといふ不届至極ゐ計畧だと卜觸し外さてふ
去年の春西國邉乃百姓一揆ハ此等の事から起たと
卜外僕もそんな馬鹿ちたとハなかろうと思へども銅
線ゐ〳〵百里も二百里も先へ便りが出来二十里三十里
乃道を繰一時ゐ半時ゐ往復をすると見さハ誠ゐ〳〵
ぎゐ〳〵成程切支丹乃仕法かと思ひ外殊ゐある物識
の法話ゐ鉄道だの傳信機ハ西洋人乃國の中ゐある野
山が幾萬里とも果なき大國ゐハ重宝な世ど日本乃
如き小國ゐハ無用ゐ物ゐその乃けハ日本のぐるりハ盡
く海ゆゑ急ゐ用事ハ蒸氣船ゐ〳〵足りその回かハ日本
船ゐ〳〵澤山ま〳〵文通ハ飛脚やへ托めば果から果まて
二十日の三十日ゐ〳〵届くゐけゐさまでそれゐ〳〵沢山用
便ふなりゐ〳〵居りしゐるる今急ゐ長崎横濱箱館の

便が一日乃中に知れるとて それと同じく頼む無き用事
もなく落入るところ無益な物でござるゆゑ無益のこと
でいなく商人などにハ大不為なくおりましてハ諸國の
相場が急に知れざるゆゑ大坂乃米を東京へ積送れ
バ利があり松前乃鰊を上方へ送れバ儲がありし
けてござるそれを鉄道や傳信機が出来てハその土
地乃人々が忽諸方乃相場を知るゆゑ他乃商人が買
出しに行ても安直にハ賣られ自然商賣が衰微する
種だと申話をきゝまするがそれハ法もなき事でござるな

人にいたせ鉄道や傳信機などいふ物ハ切支丹乃魔
法なくそれを以て日本人乃膽を挫ぎつひに日本を
甘くせしめやうといふ西洋人乃悪計でござるそれにある
方乃法話の通り日本なとゝハ無益な物なるを政府でハ
更に御存じなくゆく〳〵ハ日本國中鉄道傳信機乃
充満するやうなさるとのこと誠に〳〵痴獃とも白痴とも
申やうのなきことゆゑかの舊平抔ハ悔しく〳〵〳〵入
齒を齷齪やうに覺え升

開次郎

舊正君矣禮多かゝ足下の法語ハ皆深き理合を知ん
るさゝぬおとてなきる先蒸氣車とゝゆゝハ蒸氣乃
力て走る車ゝ一合乃水を沸騰せ全く水がなくな
るバ一石七斗の蒸氣となる即千七百倍乃容てなきる
かゝ非常ハ膨脹たる蒸氣を捕へシリンドルとゝゆゝ鉄管
乃筒乃中ハ入るその發力を藉りて車を運轉させ
る仕掛てなきるものの器械を仕掛て車を機関車と
名付ゝ乃機関車ゝ他の車二十輌乃至四十輌を
引おとてなきるさゝゝ車乃製造ハ皆大丈夫ゝく鉄乃

輪四ツ宛をつけゝゝ造り方ハ寻常の道を走るさと
が出来ませんゝ急別ハ道を平ハ車輪乃當る
とゝろハ巾二寸厚サ四寸許の鉄を二條填め常ハ
の上を往来するゝゝ鉄道でなきる
又傳信機とゝハ「エレキトル」の氣力ハよゝ音信を通
ずる仕掛てなきるものの「エレキトル」とゝゆゝ氣ハ天地間乃
萬物ハ備ゝる一ツ乃氣ゝ磁石が鉄を吸ハ
ハ此力乃あるゝゝてなきるさゝ傳信機乃仕掛
ハ「エレキトルマグ子ット」とゝゆゝ鍛鉄乃棒とガルバニッ

クバッテリー」と云ふ銅と白鉛を入れたる箱とを以て
エレキトルの氣力をおこし出すを彼是乃間ふたり
さこしたる銅線のもとゝふ通ずれい道乃遠近ふあ
いろ〳〵直ふ先方ふ通ずるゝふて此方ふ〳〵銅線乃
もとゝをイの字乃所へ當れバ先方ふ〳〵同じくイの字
をつき口の字へ當れバ口の字をつく寒ふその働自由
自在ふ〳〵恰も對面して話をするやうてあるさまこ此
等の事ハ前ふも話ひし窮理學といふ學問を學ぶ人ハ
忽乃かるたしふ〳〵ナントかるる道理を知人るまゝ〳〵鉄

道や傳信機ハ切支丹てもかくてもさうもなりまし
ひ又鉄道ハ日本のさるふめぐり海ふく船乃便利かよ
き國柄でハ無益だの青信ハ是迄乃飛脚ふく十ふ
足りる傳信機ハ余ほどあいふ事ハミる偏屈な理とこ
らぬ人の言葉てなざる第一西洋でも英國抔といふ國
ハ日本よりて少しふき位なる矢張島國てなざるこそ
ふ國中惣躰鉄道乃長サを積ミ船ハ弦人ど四千里ふも及
び侍信機ハ何所も蜘蛛の網を張るやうふ引架しく
あるこしのたとさるさバ船乃便利よき國柄ふく〳〵鉄道

傳信機ハ必用なる物と思ハれまし升譬へハ東京と横濱の
間を川蒸氣ふねで往来すれバ稍く一日ニ両度位なれど
しかしながら是が鉄道が出来てよりハ一日ニ十度ハ
往復が出来升ナント便利てハござらんか又音信も是
迄ハ稍く一日一度のところが傳信機なくハ烟草一服
吸ぬうち返事がくる寔に便利といふも舌を巻えか
なくてハならぬ升それゆゑ商賣の繁昌ハいふに及バず大事
病氣にも忽ち間にあふといふも是皆鉄道傳信機の御
蔭でござる又山國でハ是迄運送の不便なるより出来

多き産物も捨置く骨を折らぬ場所がござるそれ
が鉄道傳信機が出来運送が自由になれバ我勝に
骨を折り産物を積出して工夫をなす故自然産物
も殖え民百姓も饒富になる理にて且馬の脊を以
て運送するより鉄道の方が遥かに安價錢なれバ
おのづから産物の直段も下落するとしてござる ナント
此等を考へたら鉄道傳信機ハ國を富し民を饒
富にするにハ必用な物でハござらんか さうして鉄道傳信
機が出来れバ商人の儲がなくなり商賣が衰微さ

るとハ沙汰乃かぎり沙ハあき申さく口が閉げさせん
何故とゝハ物乃相場と〻物ハ時乃景象ハもち
高下きゝ物みゝ中〻人力を以て自由ハきゝかねハ
ゆかぬさとておぎる譬へハ豊年ハハ誰も米の直段ハ
追〻下落きゝまゝんと考つゝ米所持乃人ハ我
勝ハ賣ら人事を競ふ是ハ於て米相場ハ益〻下落
いく〻年ハハ出年ハハ出年ハかり追〻米が掛底ハ落ん
と思ふ為人〻蔵へ積込おき高直を待く賣出
きんとゝ出年ハ益〻下落きゝ何出乃ハ地ハ

ゝも品物が澤山ハく賣人が多ゝ出ハ直段乃下落ハ
必定乃さとておぎる尤鉄道傳信機が出来出ハ是迄
とかゝ日〻諸方の相場が出ハ為買人乃集り
方も自然と安く出為相場高低乃間乃日数も
是迄乃ゝ永くいさゝ外まひさ出ハ商人が平
常心ハ油断なく諸方ハ案を配りよく勉強さへ
出ハ萬事便利のよきさと為昔しよりハ儲ハ多く
あるべき筈ておぎる且商賣とゝ〻ハ千両乃商ひ
を一度〻百両乃利を得るよりハ千両乃商ひ十度

一く百両乃利を得る方が品物乃賣方もよく金銀
の融通もよき理ゆへ如何程當人の為ゆるかを計
ませんそれをたきまそのの商人い一年ゆ一度か二度の商
賣をすゝ一緊ゆ濡手て粟を獲むゆるる儲をせ
めゆるゝゆ懶惰者のし多かりし事だがたきかゝい
そんを手ぬるきゝたしでい間ゆ合ぬゆえおのづと商賣
ゆ勵も心ゆきり一年ゆ百度も二百度も商賣をする
せゆゆたらませうさそ品物乃賣方もよく又金銀
の融通もよくなる理合ゆゝ猶り商人の幸ひでい

たゝく天下一般の幸福ていさそうませんかゆせその源を
考へ出い鉄道傳信機の法蘭てがさる
舊平
陛下の法理解誠ゆ感心いゝまた實ゆ足下乃法話
乃通り當時政府の法政事とらふるめい皆民百姓我
乃安穩ゆ暮さき金銭が沢山儲ゝく沢山歡樂乃出
来るやうゆしの法趣意だゝいふたゝい了然とそかう恰
も夢の覺とやうゆ思ひ出ゆ今迄ハたゝくる道理乃あ
こ事とゝい露もとゝ只當時の事い皆異風ゝく悪

きたしとゝのゝ思ひ政府の法政道を彼是ゝゝくヤ上是
下ハ對しゝくも僻論を唱へまゝとゝけみく今更ちんと
も恐入面目なき次第てござる

開次郎

僕の愚論が法胸ハ落まゝたかを是でさを僕も法話
ヤ左甲斐があゝくよろ大をしうござる今の世の中の風
俗といふものい唯ちんろ譯も分からぬ首聾ハ昔しろ事
を悪くいひ當時ろ流行を真似る人抔が多いろハ足
下い心底天子様ハ為き思ふゝろから新規ろ物事

をろいものゝと思ハき彼是法論もいひ聞らきく事
てござるろきが僕の詰が法胸ハ落入りとりと以前
の法論を棄くちるひふきッと所ハ眞ハ日本人ろ象象
ふく責い法心感心いゝくまゝくて段ゝ法法ゝと様様
ろけゞかゝ銘く皆政府ろ法趣意を守り勉強きんこ
きバいか程面白樂ゝくも出来い程貴き身ハふ
ちゝふきろふしとふゝ　ナンー　詹平君ゝくゝ考へくろ
涙ろ流きろわゞ有難法時草てハござゝ人か

開化問答巻下終

明治七年三月新刻

東京書肆

日本橋通三丁目　丸屋善七

須田町　冨城屋藤兵衛

同　和泉屋勘右衛門